

⑦山の神遺跡

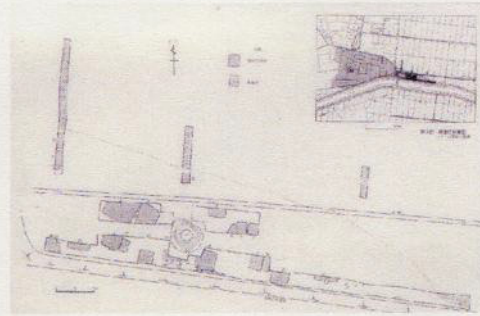
山の神(やまのかみ)遺跡は、志賀沢川北側の自然堤防(しぜんていぼう)上に営(いとな)まれた集落跡です。以前から水田中に塚(つか)のような高まりがみられ、古墳として知られていたようです。平成4年に古墳の周溝(しゅうこう)の有無を確認することを目的として調査を行ったところ、周溝はみられず古墳時代前期(4世紀)の竪穴住居跡22軒が検出(けんしゅつ)されました。それまで「山の神古墳」とされてきた高まりは、中・近世以降につくられた山の神信仰(やまのかみしんこう)に関連(かんが)する塚である可能性が高く、古墳でないことが確認されました。

なお、墳丘(ふんきゅう)は削(けず)られ地表(ちへい)から確認することはできませんが、明治時代の地籍図(ちせきず)で、山の神遺跡の西側に鍵形(かぎがた)の土地が確認されています。そこには、前方後円墳(ぜんぽうごえんぼん)があったものと考えられています。現在、この古墳跡は「弁財天(ひんさいてん)古墳跡」と呼ばれています。



III-7-①

III-7-④



III-7-②



III-7-③

いろいろな地方との交流をしめすもの

IV-1

東海地方の影響をしめす土器

市内の遺跡(上余田(かみあま)遺跡、下余田(しもあま)遺跡、十三塚(じゅうさんづか)遺跡、野田山(のだけ)遺跡、宮下(みやした)遺跡、山の神(やまのかみ)遺跡など)からは台付甕(たいづきかめ)と呼ばれる器形(けいけい)の土器が発見されています。この土器は、当時の東海地方で多く見られたもので、名取でもそれと類似(るいじ)する土器が見つまっていることから、交流関係を分析(ぶんせき)する上でも貴重な資料です。



IV-1-①-a

IV-1-①-b

近畿地方の技法でつくられた土器

野田山(のだけ)遺跡では、当時の東北地方にはなかった高度(こうた)な技法(けいぽう)でつくられた甕(かめ)が見つっています。この土器は、当時の近畿(きんき)地方でみられた丸底(まるぞこ)で、全体的に薄(うす)く、口の部分が「つまみ出し」と呼ばれる技法でつくられており、近畿地方との交流(こうりゅう)を考える上でとても重要な資料です。



IV-1-②-b

IV-1-②-a

北海道地方の影響をしめす土器

北海道地方と東北地方の北部地域では、寒冷(ひやふせい)な気候(きこう)が原因(げんいん)として十分な農業生産力が得(え)られず、大きな力をもつ豪族(ごうぞく)が生(う)まれなかったと考えられています。また、前方後円墳(ぜんぽうごえんぼん)などの大型古墳もつくられず、名取の属(ぞく)する東北地方南部の文化とは、異(こと)なっていたようです。

しかし、名取の清水(しみず)遺跡からは、北海道地方からの影響を示す資料(しりょう)が見つまっていることから、互(たが)いの地域間で交流があったようです。



IV-1-③-b

IV-1-③-a

古墳時代の焼き物

IV-2

土師器

土師器(どじぎ)は、縄文(じょうもん)土器や弥生(やよい)土器の流れをくむもので、ひも状にした粘土(かんど)を積(つ)み上げていく輪積(りんせき)みと呼ばれる方法で形をつくって焼き上げられた土器です。

IV-2-①